

〔小笠原固有植物等遺伝資源の保護〕  
小笠原固有植物等の病害虫防除技術の確立  
～ 弟島におけるカンショオサゾウムシによるノヤシの被害～  
近藤 健・宗 芳光・小坂奈月\*  
(小笠原亜熱帯農業センター・\*小笠原支庁土木課)

---

【要 約】弟島において、ノヤシの30%以上の個体にカンショオサゾウムシによる被害が発生しており、ノヤシに大きな影響を与えている。

---

【目 的】

ノヤシは小笠原諸島固有のヤシ類であり、現在、環境省レッドデータブックにおいて絶滅危惧種類（絶滅の危険が増大している種）に指定されている。新芽が食用になることから第二次大戦中にさかんに採取され、一時期は個体数が激減した。現在では個体数は増えつつあるものの、まとまった群落は無く、各島に点在するのみである。

カンショオサゾウムシ（図1）はサトウキビの重要害虫であり、ヤシ類を加害することも知られている。近年、ノヤシへの加害が知られるようになり、特に属島での被害が懸念されている。そこで弟島において被害実態調査を行ない、今後のノヤシ保護対策に役立てることを目的とする。

【方 法】

2008年5月30日、弟島北部の鹿の浜から上陸し、島の中央を通るルートを通り、南部の黒浜までの調査を行なった（図2）。ルート周辺で発見できたノヤシについて、外見からの観察により、樹高、花穂の有無、被害程度（4段階（無、小、中、大））を調査した。

【成果の概要】

- 1) カンショオサゾウムシは主にノヤシの葉鞘部分を加害しており、加害部からは樹液が漏出し、重度の場合には葉が枯れ落ちていた。また、被害を受けている葉鞘の内側からは多数のカンショオサゾウムシ成虫が観察された（図3）。
- 2) 今回の調査で観察した成木は4本、幼木は33本であり、成木は少なかった。（表1）高台から弟島の南方向を観察したところ、観察できた成木は10本以下であったことから、弟島全体に分布するノヤシは少ないと推定される。
- 3) 調査した全ての成木にカンショオサゾウムシによる被害が見られ、被害度も大きかった。一方、幼木の被害株率は27.3%であったが、幼木の樹高は0.4m程度であり樹体は小さく、長期的な生育への影響を考慮すると幼木の方が成木よりも重度の影響を受ける懸念があった（表1）。
- 4) まとめ：今回調査したノヤシの30%以上にカンショオサゾウムシによる被害がみられた。弟島のノヤシ個体数は少ないと推定されることから、ノヤシはカンショオサゾウムシから大きな影響を受けていると言える。



5mm

図1 カンショオサゾウムシ成虫



図2 弟島の調査ルート



図3 カンショオサゾウムシによるノヤシの食害

(左：葉鞘の食害部分から樹液が漏出している，右：葉鞘内側に多数の成虫がみられる)

表1 弟島におけるカンショオサゾウムシによるノヤシの被害

	調査数 (本)	平均樹高 (m)	有花穂個体数 (本)	被害程度別個体数 <sup>a</sup>				被害株率 (%)	被害度 <sup>b</sup>
				無	小	中	大		
成木 <sup>c</sup>	4	5.3	1	0	1	1	2	100.0	75.0
幼木 <sup>c</sup>	33	0.4	0	24	3	5	1	27.3	16.2
合計	37	0.9	1	24	4	6	3	35.1	22.5

a) 無：食害がみられない，小：軽度の食害がみられる，中：やや多めの食害がみられるが生育には影響は少ないと考えられる，大：重度の食害により樹の生育が影響されると考えられる

b)  $[(小 \times 1 + 中 \times 2 + 大 \times 3) / (調査数 \times 3)] \times 100$

c) 樹高3m以上の樹を成木，樹高3m未満の樹を幼木とした